

# 南海日々新聞 掲載

令和3年7月5日(月)

## 群島レポート



横山啓三さん



西田夢香さん



宮内あゆみさん

## 東城中中特別授業

## 海外協力隊から現状学ぶ

## 世界の問題「まず知って」

「世界の現状と日本は無関係じゃない。まずは知ることから始めよう。」国際支援をける青年海外協力隊経験者による特別授業が、このほど、東海市住用町の東城中中学校（水井孝典校長、児童生徒30人）であった。参加した中学生12人は、深刻な問題を伝える国や地域の現状を学び、身近にできる取り組みを考えた。（発行単位）

青年海外協力隊は、日本が満足に食べることができない行方政府開発援助の一環で、国際協力機構（JICA）が派遣する制度。同校で英語を教える西田啓三（31）は、世界最高峰エベレスト（標高8848メートル）の南アジア・ネパール（人口約3000万人）で、環境教育に取り組んだ。授業では、世界の食料不足や資源不足、食へられるのに捨てる「食品ロス」に話をした。

「日本の食品ロスは年間約600万トン。国連による食糧支援量の1・5倍とされる。穀物は世界人口を養えるほど生産されているが、家事の面に使われる量も多く、その内は主に捨てる先途で消費される。貧しい地域の人たちは

「屎によく使われる糞は、もともと植物の一部で、栽培には水を使う。糞1トン（重さ1ト）に必要なのは約2トン（重さ2トン）の肥料。主産地のインドや中国では、大量の糞を栽培するために川などに糞や肥料が流れ込み、生活水も汚染。人々の健康を脅かしている」

「環境がまず放置されるゴミは、山梨県甲府市出身の相澤寛

「家や学校、道端にゴミが散乱し、バスの窓から投げ捨てられたゴミも少なくない。最寄駅分庫ではゴミを捨却せず、押しつぶす物を捨てておける人もいます。放置されたゴミからは有害物質が発生し、環境汚染や健康被害の恐れもあるが、改善する技術や費用が足りない」

「ゴミを減らす食べる、節水する、服をリメイクする、不要な物を売らない、ゴミを分別して捨てる、もっと海外のことを調べる」。生徒たちは世界の問題を自分たちの生活に置き換えて議論。日本、東洋で今日からできる取り組みを考え、発表し合った。

西田啓三は「海外の現状を知る人から話を聞き、生きた情報に接される機会はずっと貴重。今回の授業を通じて、生徒たちが自然と正しい世界観を身につけていくことを願っています」

山梨県甲府市出身の相澤寛

6月24日に、第1回家庭教育学級で、中学生・保護者向けに国際理解教室を開催しました。発展途上国の生活や文化、ゴミ問題、世界で起きている問題について考え、自分たちができる活動について意見交換しました。